

論文

表象される乳房

——中世絵巻における差別される身体——

内 藤 久 義

NAITO Hisayoshi

はじめに

日本の中世には多くの絵巻が描かれており、現存する数は約600点とも言われている⁽¹⁾。絵巻には多様な身分の人々が描かれ、人物の背後には所属する身分階層、通過して来た歴史や文化が沈められたコードとして内在し、身体表現として表象されると考える。

絵巻には制作発注者及び絵師とそれを享受する層からの、排除や差別・弁別意識の画面上への投影があるとして論を展開する。排除や差別・弁別意識の画面上への投影とは、絵巻の発注者である貴族たち（のちに武士も）身分的高位層が、庶民及び周縁の者たち身分的下位層をどのように捉えていたのかという視線である⁽²⁾。視線は絵巻の身体表現や、画面内に描かれた人物の位置関係に表出される。

周縁の者とされた芸能者、乞食、ハンセン病患者たちは、色が黒く、細く、醜く描き（大きな耳・陥没した鼻・鷲鼻・突出した額等）、ハンセン病患者においては白い覆面、柿色の衣服の着用、また描写されるポジションは画面中央から外れた位置に描かれている絵巻もある⁽³⁾。これと対照的に貴族は色が白く、引目鉤鼻・下膨れの輪郭・小さな口でふっくらとしたプロポーションで描写されることが多い。また、武士の身体を描く場合にも独特の表現が見られる⁽⁴⁾。

さらに女性の乳房においても記号となって描かれると考え、本稿では絵巻に表現される乳房から、排除や差別・弁別意識の記号やコードを浮かび上がらせていく。この作業を行うことにより、中世の人々が抱いていた差別や排除の表象を読解したい。

尚、人権問題からも今日使用が許されない表現が出てくるが、差別や排除の問題を取り上げるとき、歴史的な観点からの使用であることをご了承ください。

I 先行研究及び諸問題

美術史学としての絵巻に関する研究は、近世から現在まで膨大な数にのぼる。美術史学の分野では絵巻の様式の解釈、すなわち描いた絵師、発注者、制作年代、技法等が研究の主体となっていた。言うまでもなくこれらは重要な作業であるが、先行研究については、本稿の論旨である身体表現やそれに付随する排除や差別に関連する研究から述べたい。

絵巻の図像から差別や排除の問題に言及した初期の論考として、1962年に発表された歴史学者横井清の研究がある。60年代になるまでこのような研究が行われてこなかった背景には、絵巻を含む

図像資料に対する歴史学からの文字資料偏重があったと言える。

しかし横井は絵巻の歴史的背景を精査し、当時の僧侶の墮落ぶりを天狗に例えた風刺絵巻「天狗草紙」(1296年)の分析によって、鎌倉時代の穢多が河原に居住していたことに着目した。描かれる内容から、鎌倉時代の穢多が皮革生産以外にも、鷹を使った狩猟や河原田畠という農耕も行ってたことを指摘し、中世賤民の生活実態を明らかにした。また、絵巻中に描かれる穢多童が、天狗の化生した鷹をしめ殺すというストーリーの発想とは、当時の支配階級(貴族)の中から明示されたものであり、穢多や非人の呼称も仏教思想を背景とした貴族の創出であることを述べる。横井は絵巻独自の異時同図の読み違えをしているものの、歴史学分野から図像資料に積極的アプローチした論考であり、絵巻に描かれる穢多の存在を図像と詞書から指摘した嚆矢である⁽⁵⁾(横井 2008:32-51)。

その後の重要な研究として、黒田日出男は多数の被差別民が描出される「一遍上人絵詞伝」(14世紀)から、乞食僧、乞食非人・不具者、癩者の描かれるポジションの相異を見出し、被差別民の中にも身分による差別があることを指摘している(黒田 1982:382)。被差別民の画面上のポジションについては、筆者の研究でも「一遍聖絵」(1299年)において、被差別民たちは画面の主題から外れた位置に描くことを述べた(内藤 2010:88-89)。

これ以降も、網野善彦(網野 1982:69-75)、丹生谷哲一(丹生谷 1986:7-18)、黒田(黒田 1987:61-78)、脇田晴子(脇田 1999:59-80)ら歴史学者によって、絵巻など図像を基礎資料として差別問題に関する文献が発表されるようになったが、美術史学からの言及は90年代半ばになるまで待たなければならなかった。

千野香織は1994年、『美術史』に「日本美術のジェンダー」を発表する。絵画を包含する芸術全体が男性性の眼差しによって構築されてきたのではないかという批判であり、ジェンダーの対概念(男性性・女性性)を用いることで、言語化の難しい日本美術の中に論理の座標軸として設定することの有用性を提言した。「まなざし」という視る者と視られる者の関係性に論及した先駆的な論文である(千野 1994:235-246)。千野以降、池田忍(池田 1997;1998)、加須屋誠(加須屋 1997;2000)らがジェンダーを絵巻読解の重要な視点として取り入れ、身分差別のみならず性による排除という広範な視線から、新たな問題へと踏みこんでいった。本稿でもジェンダーの問題を乳房という性的象徴を媒介として提起し、美術史学が見落としがちであった民俗学からのアプローチを視野に入れ論究している。

民俗学に関連する絵巻の研究として、日本常民文化研究所による『絵巻物による日本常民生活絵引』(全5巻)をあげなければならない。代表的な絵巻に登場する人物の髪型、衣服、持ち物、また建築や生活用具を図像から把握し、民俗学的視点で解説した斬新な研究成果であった(日本常民文化研究所 1965)。現在ではいくつかの誤りが指摘されているが、この先駆的な試みは今なお絵巻の事象同定に有用である。

近年の研究として、常光徹は絵巻に描かれるしぐさに呪術的伝承性を見出し、異常な場面に遭遇した際に行う身体動作を、現代に伝承される「きつねの窓」や「エンガチョ」に確認している(常光 2006:34-37)。永池健二は「弘法大師行状絵巻」教王護国寺本(1389年)の参詣する人々が蜂に襲われる場面で、口をとがらすしぐさをする少年の周辺からのみ蜂が引き返す描写を、蜂退散の呪いである「ウソブク」姿の画証であると述べた(永池 1995:130)。常光はこの「ウソブク」ことについて

ても、新潟県の老女から同様の事例を採取し、現代に継承される呪術的伝承であることを指摘する(常光 2006:126-129, 193-197)。日本常民文化研究所や常光の研究を述べるまでもなく、絵巻に描かれる身体や事象をより深度を持って読解するうえで、民俗学の視点は有効な手段である。

絵巻は多様なテーマを持ち、主題となる人物以外にも多くの人々や事象が描かれている。単一の絵画と比べると画面内の情報量は圧倒的に多い。しかし、これまで絵巻を含む図像資料が等閑視されてきたのは、前述したように歴史学を中心に文字資料の偏重があったことは否めない。絵巻を遠ざけた理由の一つに、絵画の持つ特質である「表現によるイメージの創出」があげられる。黒田日出男は以下のように述べる。

絵巻の描写は作品の表現としてあり、ただちに「生活的事実」とすることは出来ない。詞書(内容)をうけとめた絵師が描いた絵画表現なのである。したがって、絵巻のそれらは、とりあえずモチーフ(何かを書いている姿)である(黒田 1996:96)。

また、保立道久も同様のことを述べる。

相手が絵であるだけに、そこに描かれていることが、そのまま実在していたと考えがちであるが、実際には、それはさまざまなイメージの反映である場合が多い(保立 1995:176)。

当然ながら絵巻に描かれた背景や人物は、絵巻の発注者及び絵師による虚構の世界である場合も考えられるのである。しかし、1960年代になると既述した横井や日本常民文化研究所によって、描かれる事象をつぶさに観察し、現代に伝承される民俗などとも照合することにより、歴史学や他分野にも図像が資料として取り上げられはじめる。

研究の観点は変化しながらも、分析に通底するのは絵巻の発注者及び絵師と、それを享受する層の関係性である。例えば、「源氏物語絵巻」(12世紀前半)は宮廷内の高位貴族層が制作を発注し、宮中絵所の絵師や貴族が描き、宮中の一部の人々がそれを享受したと考えられる。この貴族層で制作され享受したという相関関係があってこそ「源氏物語絵巻」は成立する。「源氏物語絵巻」を当時の庶民層が見て、はたして描かれるさまざまな事象や対人関係、付された記号を理解(鑑賞)することが出来たのだろうか。そこには身分という、相異なる文化コードが横たわるのである。

II 表現される人物の身分規定について

絵巻には一見ストーリーとは無関係な人々や集団が描かれる。しかし、これらの人物は単に添景として描写されるのではなく、モチーフとして物語の場面展開に組み込まれ、また、文化的・身分的コードをともなって表出されていると考える。

乞食など周縁の者たちの身体表現が、記号としての烏帽子を被らず頭頂を晒し(図1)、体色は黒く手足は細く、また顔貌を異形に描く絵巻もある。対照的に貴族層はふくよかなプロポーションで白い体色、顔貌は引目鉤鼻又はその系統を踏襲した定型的な表現で描写される(図2)。これは貴族と



図1 「男衾三郎絵巻」(13世紀末) 周縁の者の頭髪
東京国立博物館蔵



図2 「男衾三郎絵巻」(13世紀末) 貴族の顔貌
東京国立博物館蔵

庶民及び周縁の者を弁別するコードを敷設しているからなのである。

網野善彦は中世の民衆を「平民」と「職人」に分類し、職人を道々の輩と捉えた。彼らは自由民であり公的な課役を免除されるが、かわりに専門的職能を天皇、貴族、將軍家、寺社に奉仕し、芸能者などを含め現在の一般的な通念上の製造業、手工業者たちが職人に分類されるとしている(網

野 2008a; 2008b)。しかし本稿では、文化的・政治的支配層である貴族と武士を身分的高位層、支配される側の庶民及び周縁の者を身分的下位層と規定した。庶民とは農業民と、網野の言う職人を含む烏帽子を被る人々である。

烏帽子は中世の身分を検討する上で重要な指標であると考え、小田雄三は風俗史の観点から「古代や中世は被帽の時代、近世は無帽の時代」と概括している(小田 1983: 135)。烏帽子を被る男性は中世絵巻に数多く描かれ、中世の一定時期において貴賤を問わず人と認知された成人男性の頭上は、必ずと言ってよいほど烏帽子などの被りもので覆われていた。烏帽子はファッションではなく、頭頂(鬘)を晒すという禁忌から身を護る機能を有し、一般社会に従属しているという記号でもあった。

中世の刑罰である「本鳥切」は、烏帽子を被れなくすることによる制裁である(烏帽子は鬘に紐などによって結ばれていた)。烏帽子を被れないということは一般社会からの排除を意味しており、「地獄草紙」安住院本(12世紀後半~13世紀)では地獄に落ちた男性の亡者は、すべて烏帽子を着用しておらず頭頂を見せている(図3)。また、「後三年合戦絵巻」(1347年)で捕えられた武士は鬘を掴まれており、この武士の表情からは、頭頂を晒し鬘を掴まれることに非常な恐怖と屈辱を感じていることが見てとれる(図4)。合戦絵巻では、強者が弱者の鬘を掴む場面が何点かの絵巻で確認できる。武士だけではなく庶民においても、「石山寺縁起」(14世紀)では禁忌を犯した村人は鬘を掴まれ制裁され、「粉河寺縁起」(12世紀後半~13世紀)の長者が出家する場面では、鬘を切り落とす姿が描かれていることから、鬘がなくなることによって一般社会から離脱することを意味していることが理解できよう(広川 1995: 75)。

烏帽子とは頭頂(鬘)を晒すというタブーから身を護ることであり、もう一方では烏帽子を被ると



図3 「地獄草紙」安住院本(12世紀後半~13世紀) 頭頂を晒す地獄の男たち
東京国立博物館蔵



図4 「後三年合戦絵巻」(1347年) 鬘を掴まれる武士
東京国立博物館蔵

いうことは社会の構成員として認知され、法的な権利と義務を備えたという意味がある。元服することを「烏帽子成」と言い、その際の後見役を「烏帽子親」と呼んで敬う。これは社会の一員として認知され、その証明を烏帽子親が担うことであると大間知篤三は述べる(大間知 1985: 227-231)。

烏帽子が社会構成員の象徴記号であるとしたら、烏帽子を被らない者とは社会から

離脱・排除された人，周縁に位置する者たちになるのではないだろうか．小田は中世社会の人間の構成を類型化すると，烏帽子を有する人に対して，これを持たない人は，「僧」「女性」「未成年の男子」「非人」の四類型化することができる」と述べている（小田 1983：140）．また，黒田日出男は，髪型・被りものから，中世の人々を「童」「人」「僧侶」「非人」に分類し，「人」は烏帽子・鬘によって象徴されるものとした（黒田 1986：157-158）．

しかし網野は，非人，神人，寄人，また芸能民たちも職人身分に属し，聖別された存在であったことを指摘している（網野 2005：14-15，93-98）．それでは宗教的芸能者，また散楽・田楽・猿楽などの芸能者においても彼らは卑賤視される存在ではなかったのだろうか．中世の芸能者について記した史料から検討したい．

『後愚昧記』永和4（1378）年6月7日条には，將軍足利義満が猿楽能の藤若（世阿弥）を愛玩し，同じ棧敷に招き杯を交わすことに対して三条公忠は以下のような苦言を呈する．

※以下棒線筆者

大和猿楽児童，称観世之猿楽法師也，被召加大樹棧敷，見物之，件児童，自去比大樹寵愛之，同席伝器，如此散楽者乞食所行也，（東京大學史料編纂所 1984：267）

また、『大乘院寺社雑事記』寛正3（1462）年9月28日条には，

今御門橋為作事，未申方・并院方両方屋口間別錢懸之，一間別五十文云々，五ヶ所法師原住屋懸之，無先例旨歎申入之間，可闔之旨未申一臆所ニ仰遣了，声聞法師ハ乞食也，誠以不可然事歎，（辻 1932：211-212）

と記される．同じく『大乘院寺社雑事記』寛正4（1463）年1月23日条に次のような文が見られる．

十座・五个所法師原参ス，昨日自衆中集會召北
宿者被申付巖蜜之間，宿ニ召取置金タヽキ自
衆中召返了，且目出候，七道者共ハ悉以十座・五
个所之進退之由申披故也，宿者更以不可成綺
故也，

七道者

猿楽 アルキ白拍子 アルキ御子

金タヽキ 鉢タヽキ アルキ横行

猿飼 以上（辻 1932：368）

これらの日記の文言からは，猿楽能の世阿弥を含む声聞師集団の芸能者は乞食と同類と見なされ，『大乘院寺社雑事記』寛正4年1月23日条では，七道者という排除の記号を付され記されている．検討しなければならない点は多々あるが，本稿では網野が職人と規定した人々に対しても，芸能者及び

烏帽子などの被りものがない者は周縁の者と捉え、差別や排除・弁別される対象とした。

小田は「中世は被帽の時代、近世は無帽の時代」と概括した（小田 1983：135）が、これは「中世は強い呪術的観念に支配された時代、近世は呪術的観念から解放された時代」と言い換えることができるであろう。平安期に貴族層に蔓延した触穢の思想は、中世になり庶民にまで広がっていく。しかし、ある時代を境にタブーが薄れ、やがて頭頂への禁忌がなくなっていったのである。

「呪術的観念からの解放」については、中世中期から後期にかけて緩やかに人々の頭上から消えて行ったことが絵巻からうかがえる。都を灰燼に帰した応仁の乱（1467～1477年）以後、武士についてはこれを被らない者が多く見られるようになる。しかし、それだけではなくさまざまな要因が積み重なった結果と考えられる。この時期は著しい生産力の増大が起こった。経済発展や戦乱、また烏帽子自体がだんだんと柔らかい素材から硬化し被る作法も複雑になるなど、多様な因子を含みながら人々の頭上から消えて行ったのではないだろうか（小田 1983：141、広川 1995：98）。以上を勘案しながら、「源氏物語絵巻」が描かれた平安時代後期から応仁の乱に至る頃まで、烏帽子は身分コードの機能を有していたと考え身分層選定の検討要素とした。

Ⅲ 二つの乳房——身分層による乳房表現の差異

出産の穢れ、月経の不浄など、男性がつくりだした女性性に対する排除や差別がある。絵巻に描かれる女性の乳房にも、排除や差別が記号となって描かれていると考える。

絵巻の中で乳房を出した状態で描写される女性は、所属する身分階層によって描かれる場面・状態に差異がある。貴族女性、女房、長者の娘など身分的高位層が乳房を出す場面は、死体または瀕死、狂乱の状態に描写され、非常態（非日常）で乳房を出す。これに対して身分的下位層である庶民や周縁の女性の乳房は、授乳や洗濯などの日常的な場面で描かれるのである。

庶民層及び周縁の女性が授乳や洗濯で乳房を出すことに対して、貴族女性、女房、長者の娘の乳房とは、日常においては「隠す」または「覆う」ものであり、死体、瀕死、狂乱など非常態において、はじめて乳房を露出するという複雑な視線によって描かれたことがうかがえる。

現代では公共の場で女性が乳房を出す光景を見ることはなくなった。しかし、筆者の幼少期である昭和30年代後半から40年代には、駅のベンチや路上の片すみで赤ん坊に授乳する女性の姿は珍しいものではなかったと記憶している。ほんの40数年間で身体に関する「隠す」意識は大きく変化している。それでは乳房を出すことにおいて、中世はどのような意識を持っていたのだろうか。

日本の主要な絵巻を、カラーで全図像と詞書を所収した中央公論社刊『日本絵巻大成』（全27巻）、『続日本絵巻大成』（全20巻）から66点の絵巻を選び、女性が乳房を出して描かれる場面を表にした（表参照）。表には縁起絵巻や地獄草紙等に描かれる地獄の場面で乳房を出す女性は省いている。地獄での男性は烏帽子等の被りものをせず頭頂をみせ、また男女とも全裸であることから、ジェンダーフリー、クラスフリーの状態であり、身分階層を規定する手掛かりがないことを理由とする。また、妖怪など身体的に人ではない者が乳房を出した描写も除くと、66点の絵巻中、乳房を出す女性は21点の絵巻で34人が確認された。

乳房を出す女性の身体表現は以下のようなになる。

「授乳」(乳房を出して乳幼児に授乳する)	8人
「洗濯」(乳房を出して足踏み洗い洗濯をする)	5人
「死体」(病死又は殺された状態で乳房を出す)	5人
「瀕死」(病気等で死の瀬戸際で乳房を出す, または死の瀬戸際であった)	2人
「狂乱」(憑依等によって狂乱状態で乳房を出す)	3人
「その他」(授乳・洗濯・死体・瀕死・狂乱以外で乳房を出す)	11人

乳房を出した状態としては授乳場面がいちばん多く、ついで洗濯と死体が同数で続く。その他の11人とは、着物がはだけて乳房が露出していたり、上半身が裸である場合などで、乳房を出すことに記号を付していないと判断したものである。

当初、絵巻には乳房を出す女性が多数描かれているのではないかと推測していた。むろんテーマによって異なるが、中世日本での身体を隠す意識は、現代よりはるかに希薄ではないかと考えたのである。しかし、実際には上記のような結果となった。絵巻には相対的に女性の登場者は少ない。「源氏物語絵巻」「葉月物語絵巻」などの物語絵巻、説話系の絵巻では「信貴山縁起」「伴大納言絵巻」が女性の登場数が多い方であるが、他の絵巻では登場人物は男性のみ、または男性優位の絵巻が多数を占める。

しかしそれらを差引いても、前述した筆者の幼少期である昭和30年代後半から40年代の状況に比して、中世絵巻の女性たちは身体をあまり露出していない。特に周縁の者を多く描く「一遍聖絵」(表番号45)には、乞食の女性たちも描写されているが、確実に乳房を出した状態を確認できるのは庶民女性一人のみである。また、多数の女性が描かれる「信貴山縁起」(表番号5)でも乳房を出すのは二名だけ、「伴大納言絵巻」(表番号3)では一人も描かれていなかった。単純にこれらの事例だけで推測することは出来ないが、乳房を出す女性の僅少さとは、乳房を出すことに何か特別の意味やモチーフが付与されていたからではないだろうか。

IV 下位層の乳房

(1) 洗濯をする女

地獄の場面を除くと庶民層でいちばん多く乳房を出した状態で描かれるのは、乳幼児に授乳する場面である(8人)。次いで洗濯・死体が同数で続く(5人)。乳幼児に授乳するには当然乳房を出さなければならないが、洗濯をする女性が乳房を出す必然があるのだろうか。これには特別な記号があるのではないかと推察した。

検討した絵巻の中で洗濯をする女性はすべて身分的下位層であった。乳房を出して洗濯する女性とは、中世社会においてどのような存在であったのだろうか。

古来よりいくつかの卑賤視される職業がある。例えば『古事記』では袋を持つ者を卑しい存在としている。『古事記』の大国主命は兄たちの袋を担いで従う。「その八十神、各稲羽の八上比賣を婚はむ心ありて、共に稲羽に行きし時、大穴遅神(大国主命)に袋を負せ、従者として率て行きき」と記され、倉野憲司は袋担ぎは賤業であったとの注釈を加える(倉野 2004:42)。保立道久は12世紀後半制作の「粉河寺縁起」から、袋を担ぐ人物の描かれるポジションを検討し、『日本書紀』に罪人が落

される身分として「負囊者」があり、袋を担ぐ姿は非人を象徴するもの、身分的下位であるとの認識があったことを述べる（保立 1986：29-38）。

洗濯女にも賤業として同様のコードが付されていたのだろうか。文献に洗濯女の記述が見えるのは、慶滋保胤が寛和年間（985～987年）に著した『日本往生極楽記』である。往生伝とはさまざまな人物の臨終場面を記したもので、『日本往生極楽記』では、聖徳太子をはじめ45人の往生する人々を伝える。この中で深く仏教に帰依する女が、遺言を託す記述がある。

女佛子伴氏江州刺史彦真妻也。自少年時常念彌陀。春秋三十有餘以姪妻之不同牀箒。當命終日移座于胎藏界曼荼前。此女語彦真曰。頃年洗濯女久忍臭穢。定有罪報。欲與興宅一區彦真即諾（前田育徳会尊経閣文庫 2007：55-56） ※棒線筆者

臨終に際して伴氏の妻が、私が死んだら洗濯女に家を一軒あげてほしいと夫に遺言をする。洗濯女に施しをすることにより、女は極楽往生を遂げようとする。洗濯女は「久忍臭穢」という語で表わされる最下層の穢れた存在なのである。伴氏の妻は、最も身分が低い洗濯女に過剰なプレゼントをすることで、己は極楽へ往生できると信じる。

絵巻においては14世紀に制作された「大江山絵巻」（表番号55）に乳房を出して足踏み洗い洗濯をする女性を見ることが出来る（図5）。この絵巻は源頼光の酒呑童子成敗の物語を絵巻化したもので、頼光たち一行が酒呑童子の隠れ家を探して山中を彷徨っていると、河原で洗濯をする老婆に出会う。木の葉で綴った腰巻を身に着け乳房を出した老婆は、酒呑童子にさらわれ殺された姫君たちの血に染まった衣を足で踏んで洗っている。この洗濯をする老婆が一行を隠れ家に案内し、頼光たちは見事に酒呑童子を討ち取るのである。詞書には洗濯をする老婆を以下のように記す。

頭には黒髪もなく白髪なるかかほはせたとへむ方なし
色々さま〜に血のつきたる物をあらひて木の枝にかけ
岩のかとなんとにほしかけたり（小松 1982：83-84）



図5 「大江山絵巻」（14世紀）
足踏み洗濯をする老婆
逸翁美術館蔵

白髪の老婆は死んだ女たちの血に染まった衣を洗濯し、木の枝や岩角にかけて干す。三途の川の奪衣婆を想起させる場面である。乳房を出した老婆が足で踏んで洗うのは死衣であり、酒呑童子によって殺された女の血に染まった衣服なのである。この穢れた衣を足で踏み洗い清める行為とは、斃牛馬や死体の処理をし清浄性を保つ、清目や穢多と称された周縁の人々と、同じ職能を持つのではないだろうか。

ここで注視したいのは、老婆が洗濯をする場所である。老婆は河原に立っている。もう一点注目するのが源頼光ら一行の衣装である。彼らは柿色の衣に頭巾を被り笈を背負っている。山伏の装束なのである（図6）。これは洗濯の老婆に会う前段で、山中で老翁ら4人に遭遇し山伏の衣装を授かる。老翁たちはそれぞれ、住吉、熊野那智、八幡、日吉山王の示現である。翁は「其の姿どもにては、尋



図6 「大江山絵巻」山伏に変身した頼光たち 逸翁美術館蔵



図7 「信貴山縁起」尼公巻 (12世紀後半) 朝護孫子寺蔵 書起し筆者



図8 「北野天神縁起」弘安本 (1278年頃) 北野天満宮蔵

ね給はん事叶ふべからず。縦へ兄弟なりとも、争か容易く会ふ事を得べき。姿を俏して様を変へて尋ね見給へ」と言ひ、柿衣、柿袈裟、頭巾を手渡すのである。

山伏の衣装とは変身の装束であろう。武士の姿では酒吞童子の住む異界には踏み込めない。武士という記号から逸脱し、山伏という境界性を有した周縁の者に変身しなければならない。頼光たちはさらに柿色というハンセン病者の衣と同じ色を着すことで、洗濯をする老婆が立つ川を超えられるのである。一行が遭遇する洗濯をする老婆とは、生と死、現世と異界の境界の象徴であろう。詞書にはこの老婆は生田の里の賤女で、「春行き秋蘭けて、既に二百余廻りの季月を重ねたり」と記すように、生死を超越して境界で足踏み洗濯を続けているのである。

他の絵巻に描かれる洗濯をする場所をあらためて見てみたい。「大江山絵巻」の老婆と同様に乳房を出して洗濯をする女性は66点の絵巻中以下の5点に描かれる。

- ①「信貴山縁起」尼公巻(図7, 表番号5)
- ②「北野天神縁起」弘安本・乙巻(図8, 表番号32-2)
- ③「融通念仏縁起」(図9, 表番号47)
- ④「弘法大師行状絵巻」教王護国寺本(図10, 表番号50)
- ⑤「大江山絵巻」(図5, 表番号55)

⑤以外、乳房を出して洗濯をする女性が描かれるのは井戸の側である。井戸とは現世と異界をつなぐポイントである。小野篁は六道珍皇寺の井戸を通して地獄へ通い、閻魔庁の仕事をしたという。また、死んだ者の魂を呼び戻す「魂呼び」は、井戸の中に向かって行われる例もある。「大江山絵巻」の老婆が洗濯をする川については、境としての地理的指標であるばかりでなく、穢多や河原者と称された周縁の人々は河原に住むことを強いられてきた。頼光たちは山伏という周縁の者に変身をし、川という境界を超える。同じく他の絵巻で洗濯をする女たちも、井戸という境界の装置の傍らで、賤業とされる洗濯を行うのである。



図9 「融通念仏縁起」(14世紀) シカゴ美術館蔵 書起し筆者



図10 「弘法大師行状絵巻」教王護国寺本(1389年) 教王護国寺蔵

(2) 足踏み洗い洗濯

検討した絵巻の中で、乳房を出して洗濯をする女性は5人である。洗濯方法はすべて足踏み洗いであった。これは手で洗濯物を揉んで洗うのではなく、踏石などの上に洗濯物を置き、足で踏んで汚れ

を落とす方法である。手揉み洗いより古い時代の洗濯方法とされる。足踏み洗いでは見られた乳房の描写が、手揉み洗いになると見られなくなる。これは「足で踏む」という身体表現に、何らかの記号が付されているからではないだろうか。しかし「西行物語絵巻」徳川家本（13世紀）には、井戸の傍らで足踏み洗濯をする女性が描かれるが、乳児を背負った女性は乳房を出していない。この一例を除くと、洗濯方法の相異と乳房の露出の関係は以下のようなになる。

- 足踏み洗い → 足で踏んで洗う → 乳房を出す描写がある
- 手揉み洗い → 手で揉んで洗う → 乳房を出す描写がない

中世から近世までの絵画をたどっていくと、洗濯の方法が異なっていることに気づく。洗濯方法には二通り見られ、一つは足踏み洗い、もう一つは手揉み洗いである。検討した絵巻の中で一番古い時代の洗濯場面を描くのが、12世紀後半に制作された「信貴山縁起」尼公巻である。「信貴山縁起」は、信貴山中興の祖・命蓮上人の靈驗譚である。尼公巻は命蓮の姉である尼が弟を訪ねて、はるばる信濃国から信貴山まで赴くストーリーである。その旅の途次に井戸端で洗濯をする二人の女性が描かれる。一人は井戸から水を汲み、もう一人は汚れものを足で踏んで洗っている（図7）。

ところが時代が下ると洗濯方法は、足で踏むのではなく手で揉み洗いをするようになる。手揉み洗いははじめて登場するのは「石山寺縁起」（14世紀、表番号27）である（図11）。その後の「酒伝童子絵巻」（1522～1531年）⁽⁷⁾、「洛中洛外図屏風」舟木本（1610年代）⁽⁸⁾でも手揉み洗いになり、以降、近世の浮世絵などもこの方式になっていく。なぜ、時代によって洗濯方法が異なったのだろうか。

衣料の素材として、木綿が一般に使用されるのは近世になってからである。貴族階級は絹などを着していたが、庶民はカジノキ、麻、藤蔓、楮など身近に入手しやすい植物繊維を用いて衣服にした⁽⁹⁾。当時の代表的な繊維である麻は、アサ科の一年草で中央アジア原産とされる繊維作物である。夏から秋の間に茎を刈り、その皮から繊維が採れる。繊維の特徴は丈夫なことであり、古来より衣服に用いられたと考えられている。しかし、丈夫な分、弾力性がなくゴワゴワしており、また、もう一つの特徴としてこうした繊維は肌になじまないため汚れもつきにくく、あまり洗う必要がなかったと指摘する（小泉1993：206-208、斉藤1995：41-42）。

これに対して木綿は、当初中国や朝鮮半島から輸入されていた貴重品であったが、16世紀に国内栽培が始まり、西日本を中心に生産が拡大し17世紀前半には庶民にも広く普及した（永原2004：330）。木綿は肌になじみやすい素材で柔らかく暖かい、その上、色も染めやすいという利点もあった。一方、汚れが付着しやすく麻などの繊維にくらべて丈夫ではないので、足踏み洗いには向かない。足で踏んで洗えば生地を傷めてしまう。水を張った桶に木綿を浸けて、汚れが浮き出したところで、手揉み洗いをするという方法がとられたことが考えられる（小泉1993：213）。



図11 「石山寺縁起」（14世紀）
手揉み洗いの最古の例
石山寺蔵

しかし、そうすると14世紀に制作され、最終的には19世紀まで補筆された靈驗・縁起絵巻である「石山寺縁起」の手揉み洗いの描写は、木綿が普及した17世紀前半と大きく時代がずれてしまう。佐野みどりはこの場面について、「信貴山縁起」に描かれた草摘みの場面を、「石山寺縁起」の絵師は、洗濯のモチーフとして再合成して取り入れたとする論を述べる（佐野1991：395）。

絵画資料の問題で指摘したように、描かれた事象をそのまま鵜呑みには出来ない。絵師たちは先行作品のモチーフをそのまま使用したり合成したりもする。佐野の指摘から「石山寺縁起」の手揉み洗いの事例を切り離して考えると、早い時期の手揉み洗いの図像は「酒伝童子絵巻」（1522～1531年）、「洛中洛外図屏風」舟木本（1610年代）であり、年代に若干ずれがあるものの木綿普及時期と緩やかに整合する。

佐野は重要な指摘をする。繰り返しコピーされ絵画上に登場するモチーフやシーンについて、三つのパターンがあることを明示するのである。すなわち、「異なる作品に同質の意味内容を付与する」「典拠とする作品の意味を解体し形のみを受け継ぐ」「典拠そのものが象徴のレベルを作品内部に持ち込んでいる」場合である（佐野1991：391-392）。

乳房を出し洗濯をする女とは、「井戸」「乳房を出す」「足踏み洗い」という、「信貴山縁起」尼公巻の洗濯場面を嚆矢とし、同質のモチーフを各々の絵巻が取りこんで来た。しかし、そこにはモチーフのコピーだけではなく、佐野の指摘する「異なる作品に同質の意味内容を付与」しているのではないだろうか。一端取りこんだ「信貴山縁起」の洗濯場面は解体し再構成され、「境界としての井戸」「庶民及び周縁の者としての乳房の露出」、そして後述する「呪術性を帯びた踏む身体行為」という三つの記号と意味内容を付与されて行くのであると考える。

(3) 踏むという呪術性

烏帽子が頭頂にある禁忌を覆い隠し、社会属性を象徴する記号であるとしたら、乳房を出し足踏み洗いをする洗濯女も、ある時代まで呪術性を帯びた身体記号として描かれていたのではないだろうか。洗濯をする女性は、足で穢れた衣を踏み清浄へと転換する職能を有していた。

禹歩という呪術的ステップがある。古代中国の夏王である禹の歩き方と伝えられ、禹は大地を踏み鎮めながら治水を行ったとされる。禹歩は道教や中国少数民族の儀礼にも取り入れられ、日本でも形を変え陰陽師が呪文とともに言う反問、雅楽や各地の祭礼、神事にも痕跡を残す。また、相撲の四股はもとは醜足であり、醜は強い、逞しい意を持つ。その醜足で大地を踏むことにより、邪気を鎮める意味合いがある（図12）。

それでは女性が呪術的ステップを踏む例はないのだろうか。『古事記』の「天の石屋戸」の場面では、スサノオの暴虐ぶりにアマテラスは天の石屋戸に隠れてしまう。太陽神がいなくなった世界には災いが満ちる。高天原の神々はアマテラスを天の石屋戸から引き出す方法を画策し、アメノウズメがステップを踏むダンサーとして選ばれるのである。

天宇受賣命、天の香山の天の日影を手次に繋げて、天の眞拆を鬘として、天の香山の小竹葉を手草に結びて、天の石屋戸に槽伏せて踏み轟こし、神懸りして、胸乳をかき出で裳緒を陰に押し垂れき。ここに高天の原動みて、八百萬の神共に笑ひき（倉野2004：37）。

『古事記』において、アメノウズメは乳房を出し「踏み轟こ」するのである。これは激しく強くステップを踏むことであろう。このス



図12 「浦嶋鳴神縁起絵巻」（14世紀）醜足を踏む相撲人
浦嶋神社蔵



図13 「花祭の鬼」愛知県東栄町中設楽
写真筆者

テップには隠れたものを導き出す、新たな生命の誕生や再生の意味があるのではないか。また、アマテラスが隠れたことによって「萬の妖悉に發りき」状態を鎮めるために、アメノウズメはステップを踏んだのである。折口信夫も指摘するが、「槽伏せて」とは逆さに伏せた槽であり大地の象徴である⁽¹⁰⁾。現在も愛知県奥三河の各地に伝承される花祭には、鬼が大きな鉞で大地を割る場面が演じられるが(図13)、これは新たな生命の誕生や再生を意味するものであり、アメノウズメが大地に擬した槽を踏むこともこ

れと同質に、誕生・再生を表象した身体行為であることが考えられる。

もう一点、絵巻から女性が踏む事例をあげる。「彦火々出見尊絵巻」(17世紀、表番号33)も『古事記』に題材をとった絵巻であり、「海幸彦、山幸彦」の物語である。同絵巻・巻6では、龍王の娘の出産場面が描かれる(図14・15)。産屋は安産祈念の呪術的領域に描かれる。腰抱きをする女、両手を合わせて祈る老婆、散米をするのは巫女であろうか。そして、画面手前には高く足を上げる女性が描かれる。女性の足元には土器が積み重ねられ、すでに割れているものもある。この女性の役割は踏むことにある。土器を足で踏み割ることによって、魔を寄せつけないようにしているのではないだろうか。ここでも女はアメノウズメと同じく呪術的ステップを踏むのである⁽¹¹⁾。

乳房を出し足踏み洗い洗濯をする女とは、絵巻の添景として描かれるのではなく、踏むという呪術性と境界性を有した記号として、井戸又は川の傍らに描かれるのではないだろうか。足踏み洗濯をする女性の職掌、ポジション、職能、身体表現をあげると以下のようなになる。

- 「臭穢」と形容される賤しい職業
- 井戸又は川＝境界の傍らに描かれる
- 血に穢れたものを清浄にするという役割を持っている(死体や斃牛馬の処理・清掃をする清目や穢多と同種の職能)
- 足で踏むという呪術的ステップを行っている

中世絵巻には手揉み洗いの図像が少ないので断定的なことは言えないが、手揉み洗い洗濯の女性が乳房を出さずに描かれるのは、呪術性を有していないからなのではないだろうか。「酒伝童子絵巻」

や「洛中洛外図屏風」舟木本の手揉み洗いをする女性⁽¹²⁾は乳房を出していない。この事例から足踏み洗濯をする女の乳房とは、呪術的身体の記号なのではないかと考える。

井戸端で乳房を出し足踏み洗いの洗濯をする女性が描かれる、「信貴山縁起」尼公巻、「融通念仏縁起」、「弘法大師行状絵巻」教王護国寺本、「北野天神縁起」弘安本は、宗教者が主人公又は宗教的色彩の濃い絵巻である。



図14 「彦火々出見尊絵巻」
(17世紀)呪術的空間の
出産場面 明通寺蔵



図15 「彦火々出見尊絵巻」
拡大 明通寺蔵

V 高位層の乳房

(1) 描かれる絵巻の事例

貴族女性、女房、長者の娘など身分的高位層の乳房については、死体、瀕死、狂乱など常態ではない姿で描かれると述べた。66点の絵巻の中で、貴族女性及び女房が乳房を出した死体として描かれるのは延べ4人である（表参照）。以下に身分的高位層が描かれる絵巻の作品名と描写を記す。

①死体

- 「餓鬼草紙」河本家本（12世紀後半～13世紀、表番号7）第四段に乳房を出した女性の死体が描かれる。葬送地に散乱する死体を描く場面であるが、その身分を特定することは出来ない。しかし、この女性の死体は棺に入れられており（図16）、他に肉体を残す（白骨化していない）死体が二体見えるが、いずれも庭の上に放置されている。このことから棺に入れられた死体とは、身分的高位の人間であると考えた。
- 「平治物語絵巻」（13世紀、表番号22）には、合戦に巻き込まれた多くの女性の死体が描かれているが、乳房を出す貴族女性もしくは女房の死体は、「三条殿夜討巻」に描かれる。三条殿を急襲した武士たちは殺戮の限りを尽くす。北対屋は炎に包まれ、唐衣や小袿をまとう女たちの死体が累々と描かれ、その死体のうち二人に乳房を出した描写が見られた（図17）。女性たちの死体は井戸を中心に散乱している。特に井戸には女房装束の女性たちの死体が折り重なるように描写され、また、乳房を出した死体の女も井戸の傍らに描かれる。詞書には、

御所には、軍兵、四方を打ち塞ぎ、火を放ちて、漏れ出づる者をば射殺し、切り殺す
もしや助かるとて、井にぞ多く墜ち入ける（小松1977：3-4）

とあり、炎に追われ、また乱入して来た武士から逃れるために井戸に自ら飛び込んだのである。乳房を出して洗濯をする女が、井戸と一対になって描かれるように、「平治物語絵巻」においても井戸との関係性がうかがえる。

- 「九相詩絵巻」（14世紀、表番号13）は、一人の健康な状態（生前相）の身分の高い女性が亡くなり、死体は打ち捨てられる。生前の面影をとどめた死体（新死の相）はやがて膨張し（肪脹相）（図18）、犬や鳥に喰われ（噉食相）最後には骨だけになり土にかえる（骨散相・古墳相）。この過程を九相として描くのである。嵯峨天皇の皇后である檀林皇后の病から死、そして腐敗・白骨への過程を描いた「檀林皇后九相図」なども同様に、人の肉体に対する執着を除く意図のもとに作成されたとも伝えられる。同絵巻では乳房を出す死体となった状態を七場面描くが、人数は一人として数えた。

②瀕死

- 「粉河寺縁起」（12世紀後半、表番号6）には、全身に赤い発疹の見える長者の娘が瀕死の態で横たわる。皮膚は膿んで悪臭を発するのであろうか、看護の女性は鼻を袂で押さえている（図19）。瀕死の女性はやがて観音の化身である童子の祈念により救済され、父親はじめ郎党は鬻を切り落とし出家をする。



図16 「餓鬼草紙」河本家本
(12世紀後半～13世紀)
棺に入れられた死体
東京国立博物館蔵



図17 「平治物語絵巻」(13世紀)
武士に殺された高層女性
ポストン美術館蔵
書起し筆者



図18 「九相詩絵巻」(14世紀)
高層女性の死体
個人蔵
書起し筆者



図19 「粉河寺縁起」(12世紀後半)
瀕死の長者の娘
東京国立博物館蔵

- 「石山寺縁起」(14世紀)で瀕死となったのも長者の娘である。娘はハンセン病に罹り柿色の衣を着て伏していることが同絵巻・巻五の詞書に記される。

伊勢国多気郡筒岡といふ所に松君長者
といふものありけり一人の女子癩病をう
けて年ををくりけるをさま〜祈療をいた
しけれともそのしるし(験)もなかりければ
父あまりになけきて彼女子をあひく(相具)して
当寺にこもりてこの事を祈申ける程に
ある夜夢に件女子のきたりけるかきの
かたひら(柿の帷子)を老僧一人来てはきとりて
堂内をおひ出すと見て夢さめにけり
さて下向せむとしける路にて、その瘡あと
かたなく一夜のうちにうせて世のつねの
人のはた(肌)へに成にけり(後略)(小松1978:68) ※()内は筆者による

ここでもハンセン病者は柿色の衣を着せられている。この色は「一遍聖絵」の覆面をしたハンセン病者とされる人物たち、また「大江山絵巻」でも山伏に変身した源頼光たちの衣装と同様の色なのである。⁽¹³⁾「石山寺縁起」で長者の娘が乳房を出して描かれるのは、石山寺参籠の帰途、娘は長者

に命じられ上半身をはだけ、すっかり瘡の治った姿を見せる(図20)。すでに健康な状態で乳房を出しているが、娘はハンセン病という業病により瀕死の態になり、石山寺で祈念することによって快癒することが主題であることから瀕死の項に加えた。



図20 「石山寺縁起」(14世紀)
瘡が治った長者の娘
石山寺蔵

③狂乱

- 「松崎天神縁起」(1311年、表番号57)では二場面に乳房を出す狂乱の女性を描く。あるとき待賢門院の女房の衣装が盗まれる事件が起こった。嫌疑をかけられた女房は北野社に参詣して無実を訴える。すると霊験があり、敷島という女が上半身裸で乳房を出し、盗んだ衣を頭上に振りかざし

た狂乱の態で現れる（図 21）。この敷島という女性の身分は、詞書には「はした物」と記されている。これは端者のことであろう。端者は「はしため」「下婢」とされることから、敷島は女房身分とはいえない。しかし、清涼殿庇の間に描かれること、顔貌表現が他の女房と同様に描写されることから高位層に加えた。



図 21 「松崎天神縁起」(1311年)
乳房を出し衣を振り回す
山口県防府天満宮蔵



図 22 「松崎天神縁起」錫杖を振り回す
山口県防府天満宮蔵

「松崎天神縁起」で狂乱し乳房を出すもう一人の女性は鳥羽院の女房である。女房は仁俊という世尊寺の僧侶に女心を打ち明ける。告白された仁俊は北野社に参籠し歌を一首詠むと、女房は緋色の袴だけの姿となり、乳房を出し錫杖を振り踊り狂ったのである（図 22）。

(2) 男性のまなざしによる乳房

貴族女性、女房、長者の娘など身分的高位層の乳房を出して描く場面が、死体、瀕死、狂乱と非常態であるのに対して、庶民、周縁の者たち下位層では、洗濯や授乳など日常の場面で乳房を出して描かれるという大きな相異がある。高位層と下位層では、生活形態が異なるのは自明であり、検討した絵巻でも貴族女性が洗濯など家事労働をする場面を見ることはない。乳房を出して洗濯をするという描写が、貴族層に見られないのは当然のことかもしれない。

それでは貴族女性など身分的高位層は、なぜ死体、瀕死、狂乱の状態に乳房を出して描かれなければならないのであろうか。絵巻の発注者である貴族層の男性は、同じクラスに属する女性の裸体を、絵巻であっても直接見ること avoided のではないかと推察する。同じ身分階層の女性の乳房を直接見ることとは、貴族文化のコードから外れてしまう。貴族の洗練された恋愛感覚である風雅や風流からの逸脱なのである。高位層女性の乳房を出して描かれる絵巻の制作年代が、概ね 12 世紀後半から 14 世紀であるのは、武家中心の文化になる以前の、まだ風流という文化形態が貴族生活において強く残存していた時代を象徴しているのではないだろうか。

それは絵巻において、高位層女性が乳房を出して描かれる場面が、死体、瀕死、狂乱以外は、「源氏物語絵巻」〈横笛〉に描かれる授乳する女性をのぞいて、⁽¹⁴⁾他には例がないことからもうかがえる。貴族男性が嗜好するのは裸体の女性ではなく、華麗で雅やかな唐衣に包み隠された風姿なのでないだろうか。

死体や瀕死、狂乱の女性たちの身体は、観察のない描かれ方をしている場合が多い。すなわち乳房はただ丸々としているだけで、胴体に女性の印として丸いものを描いた程度なのである。⁽¹⁵⁾対照的に高位層女性が身に纏う装束の描写は丹念である。絵巻にもよるが単に緻密に衣装を描きだすだけでなく、色の襲ね、文様を配する工夫など非常によく観察がなされている。乳房を出す女性の肉体とは異なり、観察する絵師（発注者）の執念深いまなざしを感じるのである。

身分的高位層の女性の身体は常態では衣に包み隠され、死体となった時クラスフリーとなり、はじめて貴族男性は眺めることが出来たのである。同様に瀕死、狂乱においてもクラスフリーと同じ状態になる。貴族たちのまなざしは、そこに風雅も風流も見出すことはなく、身分的下位層の女性と同様

に乳房を眺めるのである。

VI 二つの乳房の分析から

今回取り上げた絵巻からは、下位層女性の乳房は授乳や洗濯など、あくまでも日常生活の一コマとして絵巻に描かれていた。

これに対して高位層女性の乳房は、死体、瀕死、狂乱状態で描かれるが、その多くが絵画的観察の少ない、言い換えれば適当な描かれ方をしていると感じた。絵巻の内容や絵師によっても異なり、また、一人の乳房を出す女性がモチーフとしてコピーされ、異なる絵巻に描き継がれた可能性も考慮に入れなければならない。しかし、「平治物語絵巻」「石山寺縁起」「松崎天神縁起」の死体や瀕死、狂乱する女性の乳房は丸い印、まるで乳房を記号化したように描写され、そこには身体としての機能を感じることはない。

下位層の乳房を描いた「信貴山縁起」や「北野天神縁起」弘安本、「融通念仏縁起」、「弘法大師行状絵巻」教王護国寺本では、乳房はふっくらとボリューム感を持ち、また幾人かの子供を産んだ女性なのであろうか、垂れた乳房の女性も描かれる。そこには女性の出産、育児、家事といった日常生活を包含した、絵師の観察するまなざしがうかがえるのである。

足踏み洗濯をする女性については、洗濯女という卑賤視される職掌と、穢れた物を清めるという呪術的職能があるのではないかと推察した。井戸や河原という境界領域で行われる足踏み洗濯は、これに伴う身体行為、すなわち「踏む」ことに大きな意味があるのではないかと考えるに至った。中世で最も忌むべき血による穢れを、足で踏む洗濯によって清浄化することについては、芸能などの踏む身体表現を考慮に入れさらに検討していきたい。

以上の分析から乳房を出し足踏み洗いの洗濯をする女性とは、多重の記号を持って描かれており、踏むという身体行為は呪術性を有し、清目や穢多と呼ばれる周縁の者と同種の職能と境界性を持って表出されると考える。

中世絵巻における高位層と下位層の女性は、顔貌表現や衣服、さらに乳房という身体においても区分され、人間女性の誰しもが備える肉体の一部を、男性性のまなざしは身分階層によって異なる記号へと変換してしまった。下位層女性の踏むという身体、高位層女性のクラスフリーとなったときに描かれる記号化された乳房、さまざまに弁別された身体を乳房は表象するのである。

おわりに

中世絵巻に展開される事象の多くは、男性の論理と解釈によって成立していることを読み解くことができる。院政期の絵巻が制作されてから千年近い歳月を経ながら、現代に生きる筆者はほとんど違和感なく千年前の男性と同じまなざしで、絵巻に描かれる乳房を出す女性を眺めていた。「表象される乳房」とは中世と現代の時間軸を超えて、変化することのない男性性の排除や弁別のまなざしの投影であるのではないだろうか。

そのまなざしは乳房だけではなく多様な身体を含み、排除や差別・弁別の記号を付して描かれてい

た。人々が笑う姿、泣くしぐさにさえも同様の表現があることがうかがえるのである。差別、排除、弁別される身体は、モチーフとして現代にまで繰り返し描かれ続けて来た。1990年代半ば、絵画における「まなざし」の重要性を千野香織は指摘し、その後、絵画の読解はゲイズ（Gaze）を抜きにしては語れなくなった。これまでの絵巻を含む絵画・芸術、さらには文化全体が男性性のまなざしによって構築し鑑賞されてきたことへの批判であり、新たな研究の方向性を示唆するものであった。

排除の記号を丹念に中世絵巻から浮かび上がらせる作業を行うことで、新たなまなざしを獲得することができるのではないだろうか。絵巻とは過去を現代に伝える記録装置ではなく、絵巻に散在する記号やコードを読み解くことにより、連綿と続く排除や差別・弁別の構造を、「現在」という時間に置換したいと考える。

注

- (1) 『角川 絵巻総覧』に所収される絵巻の数による。この点数には断簡も含まれる。尚、出版年である1995年以降に発見された絵巻は含んでいない。梅津次郎監修、宮次男・真保亨・吉田友之編 1995『角川 絵巻総覧』角川書店。
- (2) 身分的高位層、身分の下位層については、Ⅱの「表現される人物の身分規定について」で詳述する。
- (3) 例えば「一遍聖絵」に描かれる乞食やハンセン病者は、画面の主題から離れた位置に描かれ、画面中央に位置することはない。内藤久義 2010「中世絵巻に描かれる差別意識の表現分析——身体・行為・しぐさから」の検討による。『歴史民俗資料学研究 15号』神奈川大学歴史民俗資料学研究科。
- (4) 武士の身体表現については、筆者の修士論文「中世絵巻における身体表現の研究——笑う・泣く・乳房を出すしぐさから——」（2010年度神奈川大学歴史民俗資料学研究科）において論述している。
- (5) 「天狗草紙」の詞書には「穢多、肉に針をさしてをきたるを」「すてかねて穢多童にとられて」の詞書と穢多童とされる人物が描かれる。横井の「天狗草紙」における指摘は斬新であったが、絵巻の異時同図の誤解なども見られた。横井清 2008『中世民衆の生活文化 下』pp.32-51、講談社（初出は1962年）。
- (6) いくつかの絵巻の地獄の場面で、上半身裸で緋色の袴のみ着用する女性、禪を描く男性の描写がある。
- (7) 「酒伝童子絵巻」は今回検討した66点の絵巻に取り上げていないが事例として提示した。
- (8) 「洛中洛外図屏風」舟木本は絵巻ではなく屏風絵であるが事例として提示した。洗濯の図像は、足踏み洗いと手揉み洗いの両方が描かれ、洗濯方法の移行期を示すとする説がある。
- (9) 『日本霊異記』「女人の風声なる行を好みて仙草を食ひ、現身を以て天を飛びし縁」には、大和国宇陀郡に住む女性が、貧しい暮らしの中で自ら藤の繊維から布を織って子供たちに着せたとの記述がある。
- (10) 折口信夫は日本の芸能の傾向を鎮魂と反問とに概括し、神楽の初めをアメノウズメの踊りとする。アメノウズメが踏む槽について折口は、「伏せた槽は大地に象徴される」と述べる。折口信夫 1991『日本芸能史六講』講談社（初出は1955年）。
- (11) 出産の場面で土器を割ることについて、中村禎理は出産時に屋根の上から甕を落とし破壊する風習から、産道を開く意味があったことを示唆する。中村禎理 1999『胞衣の生命』海鳴社。
- (12) 「洛中洛外図屏風」舟木本には、手揉み洗いをする女と足踏み洗いをする女の二人が描かれているが、足踏み洗いの女も乳房を出していない。
- (13) 柿色について河田光夫は『沙石集』から引用し、乞食たちに交じて修行する聖を「夏・冬をわかず、柿の麻の小袖のあはせたるを一なんきたり」の一節から、日常的に乞食や癩者と接する聖も非人と呼ばれ、聖の着ていた柿色の衣装は被差別民たちに通じると述べる。河田光夫 1995『中世被差別民の装い』明石書店。
- (14) 高位層女性が授乳の場面で乳房を出すのは、「源氏物語絵巻」〈横笛〉の、夕霧の妻である雲居の雁が授乳する場面のみである。この女性は耳挟みという、髪を耳にかけた姿で描かれ、これは古代・中世では労働

する女性の記号であり、高位層においては嗜みのないしぐさとされてきた。『宇津保物語』葦開上にも「耳挟みをしてまどひおはす」という一文が見え、また、当時の高位層では授乳等育児は乳母の仕事であったことから、この女性を雲居の雁とすることに疑問を抱く。

(15) 「餓鬼草子」河本家本の棺に入れられた死体及び「九相詩絵巻」の死体の乳房の描写は的確な観察のもとに描かれていると考える。観察のない描かれ方と指摘をしたのは「平治物語絵巻」「松崎天神縁起」「石山寺縁起」の女性たちの乳房の表現である。

絵画資料

- 以下、小松茂美編『日本絵巻大成』シリーズ所収（中央公論社）
『源氏物語絵巻 寝覚物語絵巻』『伴大納言絵詞』『吉備大臣入唐絵巻』『信貴山縁起』『粉河寺縁起』『餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』『年中行事絵巻』『紫式部日記絵詞』『葉月物語絵巻 枕草子絵詞 隆房卿艶詞絵巻』『長谷雄草紙 絵師草紙』『男衾三郎絵詞 伊勢新名所絵歌合』『平治物語絵詞』『蒙古襲来絵詞』『後三年合戦絵詞』『東征伝絵巻』『華嚴宗祖師絵伝』『石山寺縁起』『住吉物語絵巻 小野雪見御幸絵巻』『なよ竹物語絵巻 直幹申文絵詞』『北野天神縁起』『彦火々出見尊絵巻 浦島明神縁起』『伊勢物語絵巻 狭衣物語絵巻 駒競行幸絵巻 源氏物語絵巻（天理本）』『当麻曼荼羅縁起 稚児観音縁起』『能恵法師絵詞 福富草紙 百鬼夜行絵巻』『西行物語絵巻』『一遍上人絵伝』
- 以下、小松茂美編『続日本絵巻大成』シリーズ所収（中央公論社）
『法然上人絵伝 上・中・下』『慕婦絵詞』『弘法大師行状絵詞 上・下』『玄奘三蔵絵上・中・下』『阿字義華嚴五十五所絵巻 法華経絵巻』『融通念仏縁起』『山王靈験記 地藏菩薩靈験記』『桑実寺縁起 道成寺縁起』『春日権現験記絵 上・下』『松崎天神縁起』『前九年合戦絵詞 平治物語絵巻 結城合戦絵詞』『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』『芦引絵』

参考文献

梅津次郎監修，宮次男・真保亨・吉田友之編 1995『角川 絵巻総覧』角川書店
鈴木敬三 1995『有職故実図典——服装と故実——』吉川弘文館

論文

- 網野善彦 1982「蓑笠と柿帷 一揆の衣装」『is』特別号：pp. 69-75，東京：ポラ文化研究所。
- 網野善彦 2005『中世の非人と遊女』pp. 14-15, 93-98，東京：講談社（初出は1988年）。
- 網野善彦 2008『網野善彦著作集』第5巻：pp. 259-261，東京：岩波書店（初出は1974年）。
- 網野善彦 2008『網野善彦著作集』第7巻：pp. 544-553，東京：岩波書店（初出は1984年）。
- 池田忍 1997「ジェンダーの視点から見る王朝物語絵」鈴木杜幾子・千野香織・馬淵明子編『美術とジェンダー——非対称の視線』東京：星雲社。
- 池田忍 1998『日本絵画の女性像 ジェンダー美術史の視点から』東京：筑摩書房。
- 大間知篤三 1985「成年式」『日本民俗学大系 第4巻 社会と民俗Ⅱ』pp. 227-231，東京：平凡社（初出は1959年）。
- 小田雄三 1983「烏帽子小考——職人風俗の一断面——」『近代風俗図譜』p. 135, 140, 141，東京：小学館。
- 加須屋誠 1997「日本美術史のなかの「他者」，そして／あるいは，「他者」としての日本美術史——」『東洋美術史研究の展望』大阪：国際交流美術史研究会。
- 加須屋誠 2000年「日本美術における《死のイメージ》——不浄と往生——」『研究年報』第44号，奈良：奈良女子大学文学部。
- 倉野憲司校注 2004『古事記』p. 37, 42，東京：岩波書店（初出は1963年）。
- 黒田日出男 1982「資料としての絵巻物と中世身分制——宿の長使たちの画像をめぐって」『歴史評論』382号：p. 382，東京：校倉書房。

- 黒田日出男 1986『境界の中世 象徴の中世』pp.157-158, 東京:東京大学出版会(初出は1982年).
- 黒田日出男 1987「洛中洛外図上の犬神人」『国文学』pp.61-78, 東京:學燈社.
- 黒田日出男 1996「『生活誌』としての中世絵巻」『国文学 解釈と教材の研究』p.96, 東京:學燈社.
- 小泉和子 1993「近世の家事の実際を洗濯にみる」林玲子編『日本の近世15 女性の近世』pp.206-208, 213, 東京:中央公論社.
- 小松茂美編 1977『日本絵巻大成13 平治物語絵詞』pp.3-4, 東京:中央公論社.
- 小松茂美編 1978『日本絵巻大成18 石山寺縁起』p.68, 東京:中央公論社.
- 小松茂美編 1982『土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』pp.83-84, 東京:中央公論社.
- 斉藤研一 1995「服飾と中世社会」藤原良章・五味文彦編『絵巻に中世を読む』pp.41-42, 東京:吉川弘文館.
- 佐野みどり 1991「絵巻にみる風俗表現の意味と機能」秋山光和博士古稀記念論文集刊行会編『秋山光和博士古稀記念美術史論文集』pp.391-392, p.395, 京都:便利堂.
- 東京大学史料編纂所編 1984『大日本古記録 後愚昧記 二』p.267, 東京:岩波書店.
- 千野香織 1994「日本美術のジェンダー」『美術史』第136冊:pp.235-246, 東京:美術史学会.
- 辻善之助編 1932『大乘院寺社雑事記 第3巻』pp.211-212, 368, 東京:三教書院.
- 常光徹 2006『しぐさの民俗学——呪術的世界と心性』pp.34-37, 126-129, 193-197, 京都:ミネルヴァ書房.
- 内藤久義 2010「中世絵巻に描かれる差別意識の表現分析——身体・行為・しぐさから」『歴史民俗資料学研究』15号:pp.88-89, 神奈川:神奈川大学歴史民俗資料学研究科.
- 永原慶二 2004『苧麻・絹・木綿の社会史』p.330, 東京:吉川弘文館.
- 永池健二 1995「独歌(ひとりうた)考——ウソと鼻歌の始原をめぐる考察」『口承文芸研究』18号:p.130, 東京:日本口承文芸学会.
- 丹生谷哲一 1986『検非違使 中世のけがれと権力』pp.7-18, 東京:平凡社(初出は1980年).
- 日本常民文化研究所編 1965『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻, 東京:角川書店.
- 広川二郎 1995「服飾と中世社会」藤原良章・五味文彦編『絵巻に中世を読む』p.75, 98, 東京:吉川弘文館.
- 保立道之 1995「歴史論争—五味氏の『粉河寺縁起』理解に反論する 絵画資料の歴史的読み方」若杉準治編『絵巻物の鑑賞基礎知識』p.176, 東京:至文堂.
- 保立道久 1986『中世の愛と従属 絵巻の中の肉体』pp.29-38, 東京:平凡社.
- 前田育徳会尊経閣文庫編 2007『日本往生極楽記』pp.55-56, 東京:八木書店.
- 横井清 2008『中世民衆の生活文化 下』pp.32-51, 東京:講談社(初出は1962年).
- 脇田晴子 1999「一遍聖絵・遊行上人縁起絵と被差別民」武田佐知子編『一遍聖絵を読み解く——動きだす静止画像——』pp.59-80, 東京:吉川弘文館.
- 掲載図版は『日本絵巻大成』『続日本絵巻大成』(以上, 中央公論新社)からの転載による.

	作品名・制作年代・ジャンル	登場巻・乳房を出す人物	乳房を出す状況・しぐさ	場所
1	「源氏物語絵巻」 12世紀前半 物語・説話	横笛, 耳挟みの女(雲居の雁か)	授乳, 乳児に左乳房を啜えさせる	室内
2	「寝覚物語絵巻」 12世紀 物語・説話	なし	—	—
3	「伴大納言絵巻」 1170年頃 物語・説話	なし	—	—
4	「吉備大臣入唐絵巻」 12世紀末～13世紀 物語・説話	なし	—	—
5	「信貴山縁起」 12世紀後半 物語・説話	飛倉巻, 老婆か 尼公巻, 垂髪・元結の女 尼公巻, 垂髪・元結の女	着物がはだけて乳房が見える 授乳, 左乳房を乳児に啜えさせる 足踏み洗濯, 上半身はだけ両乳房出る	川辺 門の外 井戸
6	「粉河寺縁起」 12世紀後半 縁起	3紙, 狐師の妻 21紙, 長者の娘 頭巾の老婆, 乞食か	授乳, 右乳房を子供に啜えさせる 瀕死, 皮膚病, 上半身をはだけ乳房が見える 上半身はだけ乳房が見える	室内 室内 簀子
7	「餓鬼草紙」 河本家本 12世紀後半～13世紀 経説	第4段, 死体の女 第4段, 死体の女	葬送地に放置, 全裸, 下半身のみ白布を掛ける 棺に入れられ放置, 全裸, 犬が足を食う	葬送地 葬送地
8	「餓鬼草紙」 曹源寺本 12世紀後半～13世紀 経説	第2段, 頭上運搬する老婆	杖を突き上半身ははだける, 垂れた両乳房	門前市
9	「地獄草紙」 安住院本 12世紀後半～13世紀 経説	なし	—	—
10	「地獄草紙」 原家本 12世紀後半～13世紀 経説	なし	—	—
11	「地獄草紙」 益田家甲本 12世紀後半～13世紀 経説	なし	—	—
12	「病草紙」 関戸家本・他 12世紀 物語・説話			
	・鼻黒親子	鼻黒一家の妻	授乳, 左乳房を乳児に啜えさせる	室内
	・霍乱の女	白布を被る老婆	嘔吐する女を介抱, 上半身はだけ両乳房見える	簀子
	・肥満の女	垂髪・元結・笠を持つ女	授乳, 左乳房を乳児に啜えさせる	門
	・小法師の幻覚を生ずる男	垂髪の女	授乳, 右乳房を乳児に啜えさせる	室内
13	「九相詩絵」 14世紀 経説 ※1人としてカウント	新死相, 垂髪・死体の女 肪張相, 上記と同一人物 血塗相, 上記と同一人物 肪乱相1, 上記と同一人物 肪乱相2, 上記と同一人物 青瘀相, 上記と同一人物 噉食相, 上記と同一人物	臨終, 着物がはだけ右乳房を出す 膨張した死体, 全裸に腰のみ白布 膨張が破れ血膿が出る, 腰のみ白布 皮膚が破れ肉が出る, 腰のみ白布 皮膚が破れ内臓が出る, 全裸 萎む, 全裸 犬に食われる, 全裸	室内 葬送地 葬送地 葬送地 葬送地 葬送地 葬送地
14	「紫式部日記絵巻」 13世紀前半	なし	—	—
15	「葉月物語絵巻」 12世紀後半 物語・説話	なし	—	—
16	「枕草子絵巻」 14世紀 物語・説話	なし	—	—
17	「隆房卿艶詞絵巻」 13世紀 物語・説話	なし	—	—
18	「長谷雄草紙」 14世紀 物語・説話	なし	—	—
19	「絵師草紙」 14世紀 戯画・風刺	なし	—	—
20	「男衾三郎絵巻」 13世紀末 物語・説話	なし	—	—
21	「伊勢新名所絵歌合」 1295年 歌仙・歌合	なし	—	—
22	「平治物語絵巻」 13世紀 物語・説話	三条殿夜討巻, 死体, 女房か 三条殿夜討巻, 死体, 女房か	戦場で殺される, 上半身はだけ両乳房出る 戦場で殺される, 右乳房を出す	井戸側 井戸側
23	「蒙古襲来絵巻」 1293年 物語・説話	なし	—	—

	作品名・制作年代・ジャンル	登場巻・乳房を出す人物	乳房を出す状況・しぐさ	場所
24	「後三年合戦絵巻」 1347年 物語・説話	なし	—	—
25	「東征伝絵巻」 1298年 高僧伝	なし	—	—
26	26-1「華嚴宗祖師伝絵」 義湘絵 13世紀前半 高僧伝	なし	—	—
	26-2「華嚴宗祖師伝絵」 元暁絵 13世紀前半	なし	—	—
27	「石山寺縁起」 14・15・19世紀 縁起・靈験	巻5、長者の娘	瀕死から復活、瘡の消えた乳房を父親に見せる	門前
28	28-1「住吉物語絵巻」 静嘉堂本 13世紀後半 物語・説話	なし	—	—
	28-2「住吉物語絵巻」 東京国立博物館本	なし	—	—
29	「小野雪見御幸絵巻」 13世紀後半 物語・説話	なし	—	—
30	「なよ竹物語絵巻」 14世紀 物語・説話	なし	—	—
31	「直幹申文絵詞」 13世紀後半 物語・説話	なし	—	—
32	32-1「北野天神縁起」 承久本 1219年頃 縁起・靈験	なし	—	—
	32-2「北野天神縁起」 弘安本 1278年頃 縁起・靈験	乙巻、鳥羽院の女房 乙巻、子供と洗濯する女	狂乱、上半身裸で緋色の袴、錫杖を振る 足踏み洗濯をする、裾をからげ上半身はだけの	簀子 井戸
33	「彦火々出見尊絵巻」 17世紀 物語・説話	巻5、龍王の娘 巻6、柱を抱く龍王の娘	着替え、上半身はだけ右乳房が見える 出産場面、下半身は白い着物、上半身裸	室内 室内
34	「浦島明神縁起」 14世紀 御伽草紙	なし	—	—
35	「伊勢物語絵巻」 13世紀末 物語・説話	なし	—	—
36	「狭衣物語絵巻」 14世紀 物語・説話	なし	—	—
37	37-1「駒競行幸絵巻」 静嘉堂本 13～14世紀 物語・説話	なし	—	—
	37-2「駒競行幸絵巻」 久保家本 13～14世紀 物語・説話	なし	—	—
38	「源氏物語絵巻」 天理本 14世紀 物語・説話	なし	—	—
39	「当麻曼荼羅縁起」 13世紀半 縁起・靈験	なし	—	—
40	「稚見観音縁起」 14世紀 物語・説話	なし	—	—
41	「能恵法師絵詞」 13世紀 物語・説話	なし	—	—
42	「福富草紙」 春浦院本 14～15世紀 御伽草紙	上巻、老婆（秀武の妻） 下巻、授乳する女	寝具に横になる、右乳房が垂れる 授乳、右乳房を乳児に啜えさせる	室内 框
43	「西行物語絵巻」 徳川家本 萬野家本 13世紀 物語・説話	なし なし	— —	— —

	作品名・制作年代・ジャンル	登場巻・乳房を出す人物	乳房を出す状況・しぐさ	場所
44	「西行物語絵巻」 渡辺家本 17世紀 物語・説話	なし	—	—
45	「一遍聖絵」 1299年 高僧伝	巻7, 桂の道場, 乞食の女か(不鮮明) 巻8, 頭上運搬の女	上半身裸で正座, 両手を突く, 鉢を置く 着物の前はだけ荷物を運ぶ, 両乳房出す	寺域 路上
46	「芦引絵」 15世紀半 御伽草紙	なし	—	—
47	「融通念仏縁起」 14世紀 高僧伝	下巻, 鬘を結び洗濯する女	上半身をはだけ足踏み洗濯をする, 右乳房出る	井戸
48	「春日権現験記絵」 1309年, 模写 縁起・霊験	巻9, 乳児を連れた女	着物がはだけ両乳房出す, 隣に乳児	框
49	「慕婦絵詞」 1351年, 1482年補写(巻1・7) 高僧伝	なし	—	—
50	「弘法大師行状絵詞」 教王護国寺本 1389年 高僧伝	巻1, 白布を頭に巻く女 巻3, 乞食の家族・女 巻7, 野外に捨てられた老婆 巻7, 野外に捨てられた老婆	足踏み洗濯をする, 上半身はだけ左乳房見える 家族と庭に座る, 赤子に左乳房を咥えさせる 裸で嘔吐する, 頭に白鉢巻, 両乳房見える 横たわる, 裸に着物をかける, 両乳房見える	井戸 寺域 野外 野外
51	「桑実寺縁起」 1532年 縁起・霊験	なし	—	—
52	「道成寺縁起」 16世紀 縁起・霊験	なし	—	—
53	53「土蜘蛛草紙」 14世紀前半 御伽草紙	なし	—	—
54	「天狗草紙」 1296年 物語・説話	なし	—	—
55	「大江山絵巻」 14世紀 御伽草紙	上巻, 木の葉の腰巻を着ける老婆	足踏み洗濯をする, 右乳房を確認できる	河原
56	「法然上人絵伝」 14世紀半 高僧伝	なし	—	—
57	「松崎天神縁起」 1311年 縁起・霊験	巻4, 垂髪, 紅袴, 女房か 巻4, 垂髪, 紅袴, 女房	狂乱, 衣装を被る, 上半身裸, 両乳房見える 狂乱, 錫杖を振り回す, 上半身裸, 両乳房見える	箕子 箕子
58	「山王霊験記」 1288年 縁起・霊験	なし	—	—
59	「地藏菩薩霊験記」 13世紀後半 縁起・霊験	なし	—	—
60	「玄奘三蔵絵」 13~14世紀 高僧伝	巻10, 女, 首から下のみ描写	子供に授乳, 片乳だけ出す, 乳首の描写	路上
61	61-1「前九年合戦絵詞」 国立歴史民俗博物館本 13世紀 物語・説話	なし	—	—
	61-2「前九年合戦絵詞」 五島美術館断簡 13世紀 物語・説話	なし	—	—
	61-3「前九年合戦絵詞」 東京国立博物館本 14世紀 物語・説話	なし	—	—
62	「平治物語絵巻」 13世紀後半 物語・説話	26紙, 垂髪の女房	狂乱, 上半身がはだける, 両乳房見える	箕子
63	「結城合戦絵詞」 15世紀末 物語・説話	なし	—	—
64	「阿字義」 12世紀末 経説	なし	—	—
65	「華嚴五十五所絵巻」 東大寺本 13世紀 高僧伝	なし	—	—
66	「法華経絵巻」 13世紀前半 経説	なし	—	—